子どもの心配で騙されないために

代々木病院
竹内　真弓

1.「引き出し屋」事件

2019年４月19日、20年間ひきこもっていた関東の男性が、いわゆる「引き出し屋」に無理やり連れ出され、熊本で亡くなっているニュースがありました。また別件では2019年12月、ある「引き出し屋」業者に、無理やり引っ張り出され監禁された女性が業者を訴え、勝訴しました。

いずれもひきこもりとされている方の親が、数百万から数千万のお金を業者に払って「子どものひきこもりを治してほしい」と依頼していました。「ひきこもりを半年で治します」「就職、自立させます」と謳った業者は複数ありますが、医療でも教育でも福祉でもなく、独自の理論にもとづいて、ひきこもりとされている方を集め、人権を無視した方法で作業をさせるなど、数々なトラブルが起きています。

2．ひきこもりとは

厚労省の定義では「ひきこもり」とは、①６カ月以上社会参加していない、②非精神病性の状態である、③外出していても対人関係がない、というものです。基本的に精神科疾患が原因でひきこもっている方はあてはまりませんが、ひきこもると強迫神経症になりやすく、精神疾患はひきこもる原因となりやすいため、単純ではありません。

統計では2016年に15歳～39歳で約54万人、その後さらに高齢世代を含めると2019年では40歳～64歳に約61万人以上という数が出ています。70人に１人がひきこもっているという統計もあります。ということは、今の小学校（35人学級）で２クラスに１人はひきこもりになるということです。経験者となるともっと多くなります。

さらに、ひきこもりは長期化、高齢化、開始年齢の上昇がみられており、すでにひきこもり人口の半数以上を中高年が占めています。これが親の介護問題と重なると8050問題となるわけです。親との同居率が70％前後の国々は、日本、韓国、イタリア、スペインですが、これらの国々では親の世代の収入を子どもの世代が超えられな

くなっています。同居率の低い英国、米国では成人後すぐ家庭を出て自立しますが、失職すると容易に若年性ホームレスになりえます。欧米ではホームレスになると犯罪に巻き込まれ、違法薬物の問題が生じます。日本では、親との同居が安全に自分を守る手段となっているともいえます。

3．なぜ日本の子育てが大変なのか

1979（昭和54）年発行の自民党研修叢書（議員の教科書）には「日本型福祉社会」として次のように書かれています。

「男性は企業正社員になり企業からの所得を源泉とし、女性は家事、育児、介護を担う（家族主義）。自立とは所得保障を得ること。子どもができたら社会保障として国の基準の学校に通わせる」

つまり、国民が税金を払うように働かせ、子どもは労働力の再生産として育てるということです。私たち親は「この子が将来きちんと食べていけるだろうか」ということに答えが出せず、子どもの将来に不安を感じています。

60年代から高度経済成長が終わり90年バブル崩壊の後、私たちが子どもに期待した大企業の終身雇用はもはや安定的とは言えません。こういったひずみが当然子どもたちにも影響して、様々な形でひきこもりとなっているという仮説は社会学者たちも主張するようになっています。

そこで問われるのが、教育と社会保障です。世界を見渡すと日本と違う点が様々見つかります。ハワイでは民族的方針で公的教育に賛同できないとき、自宅で教育をするホームスクーリングという手段をとる家庭があります。フランスはジプシー文化がある国ですが、親が子どもを連れて世界を回る旅に出かけるとして、行く先々がわかればそこに学校が課題を送り、課題を返送することで単位を修得することを許す学校もあります。オランダでは多様な教育に国は助成をみとめており、ホームスクーリングにも助成が出るそうです。

このような教育の多様性をみると、日本の教育システムは「形ありき」であり、融通がきかないことこの上ないと言わざるをえません。また社会保障、福祉についていえば、世界規模でいうと日本の福祉は「ないに等しい」と言われるような貧困さです。そのような日本の現状で、親たちは自分の子どもが「不登校になるのではないか」「子どもがいじめを受けたら」あるいは「いじめる側にならないか」とびくびくしながら子育てをしています。そして、親たちも教育費をひねり出すために家庭を犠牲にして働き、子どもの世界を理解する余裕もありません。

子どもが不登校になれば、日本では何の保障もなく、成人して生活保護を受給するか、精神疾患が認められれば障害年金を受けるくらいしかないのが日本の現状ですが、海外ではもっと手厚く、気軽な保障があります。子どもが社会人になって、自分で生きていけるシステムがあるのです。そういった意味でも、われわれが払っている税金がもっと福祉に使われるように指摘する必要があります。

4．価値観に惑わされないで、その子のいいところをみつけて

様々なご家庭の相談を受ける立場として、最近気になることがあります。親の価値観を過度に押し付けるご家庭が多いことです。親の教育歴が高ければそれと同等かそれ以上のレベルを求める、学歴にこだわる、就職先にこだわる、などです。親としては子どもに幸せになってほしい気持ちがあるのだと思います。私も親の立場となって、考えました。「子どもにはどうなってほしいか」ということを考えた結果、こんな答えが出てきました。「たとえ、地位がなくてもお金がなくて苦労しても、その子なりに生きていてよかったという喜びを感じられる人生を送ってほしい」

社会の意識は変化します。親の感じる幸せが、子どもの時代の幸せとは限りません。また親子といえども別の人間です。今までの日本は「よくないところを正す」教育が主流でしたが、今は「ほめて伸ばす」時代になっています。ぜひご家族で、それぞれのいいところを言葉にして伝えてみませんか。

5．業者に騙されないために

ひきこもりを治すといった業者に頼んでしまう親の方々が共通して持つ不安が「このままひきこもりが続けばどうなるのか」「親が死ぬ前になんとかしなくては」「行政は相談しても何もしてくれない」というものです。ひきこもりと言われる方々は、様々な状況を持っています。業者が謳うように半年で何とかなるものではないことが多いです。そしてそれは本来親が引き受けるべきものではないはずです。また行政の対策も日々変化しており、現在は各区市町村がひきこもり相談センターを開設しています。専門家ではない業者に頼むのではなく、まずは区市町村の保健所などにご相談ください。

（たけうち・まゆみ＝渋谷区）

・参考資料

1）中垣内正和「はじめてのひきこもり外来」ハート出版

2）本田由紀「日本ってどんな国？」ちくまプリマー新書

3）加藤隆弘「みんなのひきこもり」木立の文庫

4）高橋淳「ブラック支援～狙われるひきこもり」